

書く人

「遊山」「行き暮れて、

山。」「人はなぜ山を詠うのか」など、この二十年ほど「山の詩人」と呼びたいほど、山をテーマとした詩集や著書が多い。自然の文化誌「やまかわらみ」の編集も手掛け、山登りの同志と「遊山会」をつくり、日々山行を重ねている。

「行き詰まりと深酒の果てに死んだ詩友を横目に、五十歳の声をきく頃から、新宿のネオンに背をむけ山に向かった。三十年ぶりに丹沢の大山にせいせいしながら登り、次第に山歩きに婁し始めた。利尻岳・鳥海山・高尾山・開聞岳など、高低こだわりなく列島の山々を歩いた。山登りの前に地誌や山を詠った詩歌を探して読み漁り、発表の目途もなく登山の記録や山の文化

『山水の飄客 前田普羅』

詩人 正津 勉さん (70)



誌を書き始めた。現代詩では年がとれないんですね」先人の紀行や詩歌を見いだして山に登り、書くことで山を追体験する。前田普羅もそんななかで知った偏愛の俳人。高浜虚子の高弟

句の背景を訪ね山行

で近代の山岳俳人の先駆者だ。〈地貌〉という言葉で土地の風土を写生し、甲斐や信州、立山や飛騨の山影を俳句の言葉と一体化させた。〈茅枯れてみづがき山は蒼天に入る〉〈弥陀ヶ原

溱ふばかり春の雪〉…。

普羅の人生や句作を浮かび上がらせるために飯田蛇笏・原石鼎・若山牧水・斎藤茂吉など同時代の詩歌人を登場させる。自身の登山体験をいかして句の背景となった山々の民俗文化にも触れてゆく。さらに、山を歩き渓谷を探索する飄客の面影から一転、戦時中の翼賛俳句、居場所をなくした

落魄の晩年における保田與重郎や棟方志功との交友にも言及する。

頑固で狷介な性格が災いしてか、普羅の句作や人生の検証はほとんどなされてこなかった。「私の好きな

河東碧梧桐も虚子に反旗を翻してご同様の処遇。碧梧桐も百年前に日本の津々浦々を歩き、〈立山は手届く爪殺ぎの雪〉など山の名句を作った。写生一筋の普羅にとっては敵將の俳人。でも山頭火や井月のような、のけ者にされ放浪しながら山河を詠った天の邪鬼の詩歌人に関心がある。で、俳句詠みではないけど、及ばずながら普羅や碧梧桐の評伝を書いた」

いま取り組んでいるのは、松尾芭蕉の門弟で〈乞食俳人〉と呼ばれた八十村路通の評伝という。「山は登らなければ詠えないし書けない。これからも山歩きを続けます」。アーツアンドクラフツ・一九四四円。(大日方公男)